



写真1

貧しいことが不幸なわけではなく、同じ国・地域の中に目を見張るほどの格差があることが悲しい。皆が靴を履けるようになることを祈る。



写真2

スラム街でたくましく生きる子ども達の笑顔。普通に学校に通えることの何とありがたく素晴らしいことか。貧困の連鎖を止め、彼らが大人になった時も笑顔でいられる為に私たちに出来ることを考えたい。





写真3

穴があき、擦り切れサイズも合わない柔道着を大切に着ていた。私たち日本人が忘れかけてしまった、ものを大切にする心、礼を大切にする心が、ザンビアの子ども達に受け継がれていた。



写真 4

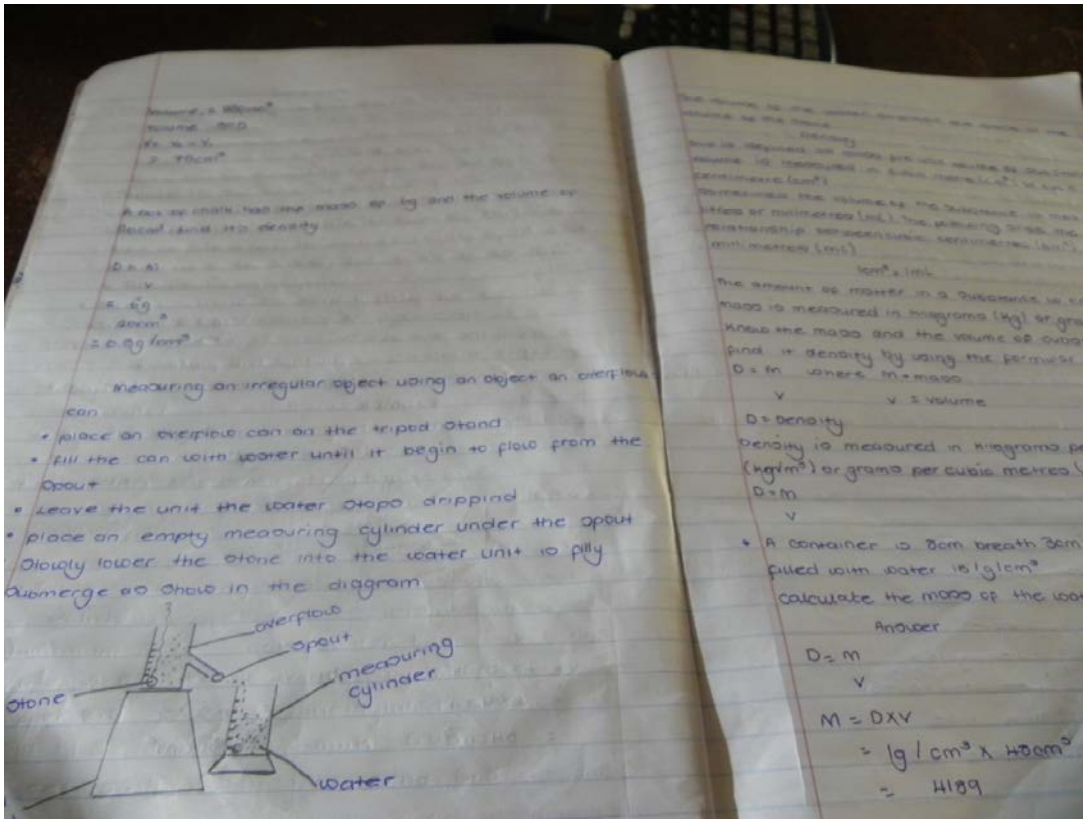
子ども達はそれぞれ複雑な家の事情を抱え、学校は行けるようになったら行くところ。身長がまちまちなのは同じ学年でも年齢が違うから。停電で教室が暗くても子ども達の笑顔は明るい。



写真 5

割れた窓ガラス、ぼろぼろの黒板、環境は良いとはいえない中でも子ども達に暗さはなく、人懐っこい笑顔を見ることができた。逆境の中でもひたむきに目の前のことに懸命に取り組む姿を見た。





落書き1つないノートと広告できれいにラッピングされた教科書。1人でノートと教科書を占有できるのはとてもありがたいことで大切に大切に扱うのだという。(写真6・7)



写真 8

「ないなら作ろう」精神はどこに行っても感じる事ができた。カレンダーは頂くか買うものだという思い込みに衝撃を受けた。ないなら作ろう・工夫しようという心意気は素敵だ。31日がないのは御愛嬌。